

二〇三三年六月九日

雲あひに現れては隠れ梅雨の望  
風道を知らず早苗の揺るぎかな  
つつましく生きる暮らしや日向水  
大和なれ植田の中に古墳見へ  
時の日や吾子は地球の裏側に

二〇三三年六月八日

灯ともせば玻璃に頭突きす蠅あはれ  
大の文字くつきりと山滴れる  
帽子脱ぎ緑陰に髪ほどきけり

二〇三三年六月七日

冷奴四つ切りにするたなごころ  
朝顔の鉢それぞれに児童の名  
コバルトの空の目に沁む五月晴

二〇三三年六月六日

デートの娘鏝を目深に夏帽子  
ピンセットもて草取りす小鉢かな  
時の日や時の縛りの無き余生  
農小屋に籠もりし日々や梅雨しとど  
半夏生看護の日々を慈しみ  
幼な子を両手に潜る茅の輪かな

二〇三三年六月五日

白波の河口に遊ぶ月涼し

二〇三三年六月四日

身に馴染む義父の形見の夏衣  
梅雨晴間雲の上なる伊吹山  
山百合も売らるる無人野菜店

二〇三三年六月三日

迷路めく紫陽花寺を巡りけり  
手花火の子ら車座に膝小僧

素 秀

せいじ

隆 松

む べ

なつき

みきお

毎日句会みのる選・二〇三三年六月二日